

人口と所得を取り戻す1%戦略

— 定住と循環を支える社会システムを —

【財団設立40周年記念セミナー】

島根県中山間地域研究センター 研究統括監 藤山 浩



(この原稿は講演をもとに当センターが文章にまとめたものです。)

1. はじめに

みなさん、こんにちは、藤山と申します。

今、時代は大きく変わりつつあります。もっと言うと文明が変わりつつある。この事実、この新しい風を、今日は皆さんと一緒に共有させて頂きたいと思っています。

私は、島根県中山間地域研究センターに勤めています。このセンターの特徴は、分野縦割りでやっていないことです。これは、政策研究にとって非常に重要なことです。今は、農業は農業、林業は林業、経済は経済というような、縦割りで個別最適を考えるのではなく、全体最適を考える時代です。

しかも、このセンターは島根県のセンターですが、同時に、中国地方5県共同の研究センターでもあります。

2. 人口の1%取り戻し戦略

(1) 都市で何が起きているか

① 団地の一斉高齢化

先ほど時代が変わると申しましたが、今までがどういう時代だったか、そして、何に限界が来ているか、都市から先に見ていきます。

この半世紀を振り返ると、田舎から都市へ人口が出た時代でした。私が生まれた頃(1959年)、過疎が始まり、今度は都市で過密が始まり、都市の郊外に団地が70年代80年代に数多く造られました。図1は、広島市郊外の団地ですが、3,000世帯1万人です。わずか10年で造られました。当時は、そういうやり方が、規模の経済にかなっていると思われていました。ドカーンと作ってドーンと入って。しかし、長い目で見ると、高

都市の団地で何が起きているか！?



図1 広島市郊外の団地

いツケを払いつつあります。団地には、ほぼ同世代が一斉に入居しますから、今、前代未聞の一斉高齢化が起きています。

団塊世代から都市への流入が始まりましたが、今や団

●2015年危機=都市団地の高齢化率、田舎超過!

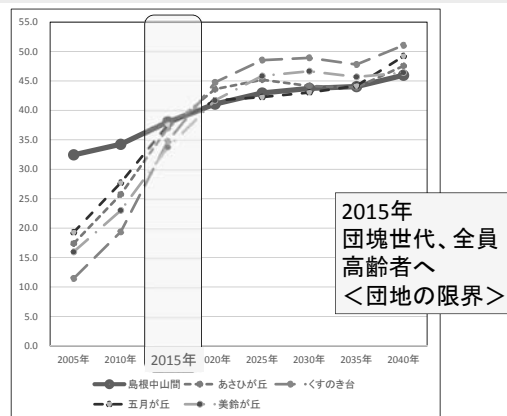


図2 島根中山間地と団地の高齢化率

塊世代は全員65歳以上となりました。図2は、高齢化率のグラフですが、太い線が島根の中山間の高齢化率です。10年前までは、都市団地の高齢化率は、島根の中山間と比較して2分の1か3分の1の高齢化率だったんです。ところが、一気に、都市団地の高齢化率が島根の中山間を追い越してしまったんです。

問題なのは、この急激な一斉高齢化で懲りればいいのに、まだ団地を造っていることです。昔と一緒にのこすれば、必ず一斉高齢化になります。タワーマンションも同じことです。もう、大きな団地やマンションを大量に造る時代ではありません。長い目で見ると非常に高くなります。

② 荒涼たる団地の風景

高層住宅の走りとされる東京の高島平。10年前ここを視察したんですが、当時、高島平では、既に高齢化率が島根を超えていました。そして、小学校は奇数番号しか存在していなかったんです。存在していたのは、第1小、第3小、第5小でした。第2小と第4小は、消えてなくなっていました。何と儚いことでしょう。

そして、団地のエレベータや階段の踊り場の空間がとても狭い。皆さんも老後のためには、早く団地を出ないと困ります。というのは、エレベータの奥行きが1メートルぐらいしかない(図3)。この奥行だと、年にとって病気になるでも担架が入りません。亡くなくても、棺桶が入りません。立たせて出さなければならない。そこで、最近では、「ここに穴があいてて、棺桶がはいるように



図3 奥行きのないエレベーター

しました」とか言っているそうですが、そういう問題ではありません。

大阪とか東京の都会では、都心近くに、団地がまだどんどん建っているため、郊外のかつての団地がもうボロボロになっています。すべてが都心に引き寄せられるため、郊外の団地には荒涼たる風景が広がっているのです。

③ 長時間労働、長時間通勤

私は、田舎の島根出身だったので、一度は都会へということで、都会の大学に進学したんですが、「ダメだこれは。この満員電車30年は無理だ」と思って、都会で就職しないで帰ったんですが、日本の都会は世界に冠たる長時間労働、長時間通勤になっています。そして、長時間労働、長時間通勤の一番犠牲になっているのは、父親の帰宅時間です。

私は、家族でおいしい夕飯を食べることが一番大切なことだと思います。人間としても生き物としても。おいしい夕食、家族との団らんが目的であって、バリバリ働くためのエネルギーとしてカロリーを補充しているのではないのですから。

さて、東京のお父さんは家に帰っていません。図4は、主要都市の父親の帰宅時間が8時以降の割合を表したものです。これを見ると、パリでさえ夜8時には7割のお父さんが帰っているのに、東京では6割以上のお父さんが帰っていない。皆さん8時に帰宅していますか。私は、半分はこうやって現場で外に出ていることも多いんです

世界的に異常な東京の暮らし

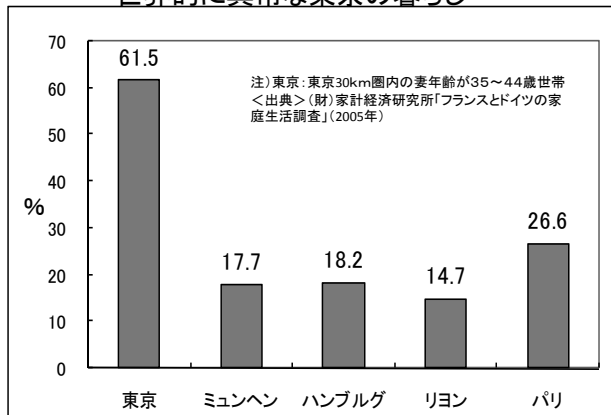


図4 夫の帰宅時間が8時以降の割合 (1999年)

が、半分は家でちゃんとご飯を作っています。これは、負担ではあるけれども、特権なんです。

この東京の数字、異常な数字です。妻の年齢35歳～44歳、かわいい盛りじゃないですか。何のために働いているのかということです。子供のことを考えたらよくわかる。帰宅時間が遅く、家族とのふれあいが無いというのは、やってはいけません。グローバル、グローバルとか言う人がいますが、私からしたら帰宅時間をグローバルにしてからモノを言えと言いたい。都市に集めすぎた弊害が、ここにも起きています。

④ 杉並区の将来

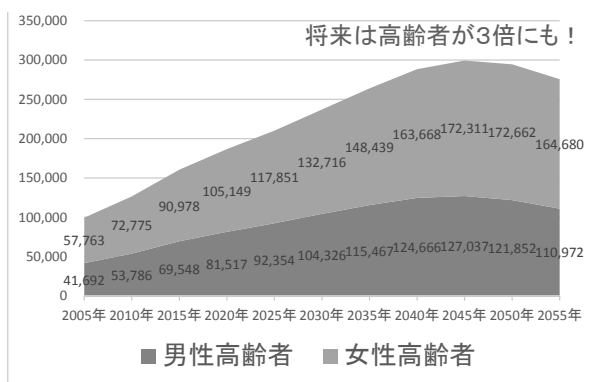
そして杉並区。何かハイソな感じがする杉並区ですが、私の開発したプログラムで、杉並区の人口を分析・予測すると、これは大変です。図5を見てください。

30年後、高齢者数が3倍になります。1平方キロに高齢者だけでほぼ1万人。高齢者の人口集中地区になります。分かりやすく表現すると、小学校の校庭ぐらいのところに高齢者が100人生活する状態を想像してください。これ介護や医療はもちろん、いったい、どういう暮らしをするのでしょうか。

この半世紀、東京へ東京へと集めすぎた弊害が、こうした一種のカタストロフィーに向かっている訳です。

⑤ 田園回帰へ

さらに最近では、タワーマンションが拍車をかけています。このままいくと、どうしようもなくなります。バ



2045年・30年後には、高齢者総数は30万人へ1平方キロ当たり、8,789人(杉並区面積34.06km²)100m四方に88人→介護や医療だけでなく、生活も限界

図5 杉並区の高齢者数の予測

ランスをとらないといけない。そのための田園回帰なんです。

今から50年前、過疎が起これ、最初の団塊世代が団地に入り、その団地で高齢化率が田舎を上回りつつあります。これ以上行き場がない状況です。なのに、まだ集中型をやろうとしている。それが信じられない。そうした矢先に東日本大震災が起きて、これ以上集中型の国土を作ってどうするんだということになっています。

そういう動きを、感じ取らなければならない。地球の環境、資源・エネルギーも、都市へ人口と産業がこれ以上集中すると、もたないということがはっきりしています。だったら、やはりもう一度原点に戻り、それぞれの地元を一つ一つ持続可能な形に変えていく。これがこれからの地域政策であり、研究の本当のミッションであると私は信じています。私たちは、いままで集中型で生きてきました。しかし、これから先に延長してはダメなんです。変えていかねばならない。

(2) 「田舎の田舎」に次世代定住

① 定住の基礎的単位「地元」

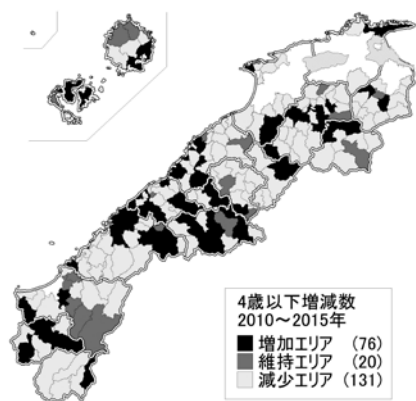
そのような状況の中、「将来、都会はやばいなあ」と思う人から、田舎に帰り始めています。過疎という言葉が生まれた、すなわち過疎が始まったといわれる島根県の山の中で、実は結構すごいことが起きています。田舎の田舎で次世代が増えている。移住定住です。

このことは、平成の大合併で、島根の59市町村を19市町村に合併してしまったので市町村単位に見ても分かりません。合併後の市町村で見ると、色を混ぜたら全部灰色になるのと同じで、平均化され特徴や特性が見えなくなります。

市町村単位ではなく、これからの定住や地域づくりを考えるための「基礎的な単位」はどれくらいの規模が適切なのかということをも4年前に徹底的に議論しました。そして、その単位は、市町村も大切、一番基礎的な集落も大切だけでも、市町村と集落の間ぐらいで、暮らしのための文化があり、経済循環の基本的単位である「地元」であると結論しました。

「地元」それは丁度、昭和の旧村ぐらい。今の小学校区とか公民館区が該当します。平均人口1,370人500世帯、そういうお互い顔が分かる範囲です。「地元」単位

『田舎の田舎』に次世代定住



2015年合計特殊出生率=全県1.80(全国2位) 1位沖繩1.94、全国平均1.46、宮城1.31

3分の1を超える(33.4%)で
4歳以下の子供が増えています！
(維持も20地区)合わせて4割強

図6 島根県の4歳以下子供の増減数の状況
(2010～2015年)

にカルテをつくり、「地元」単位に定住を取組む、という方針に基づき定住を実践しています。

② 島根の田舎で人が増えている

「地元」単位で見ることによって、どこで4歳以下の子供が増えたのかが、よく分かります。図6は、4歳以下の子供の増減数を島根の地元単位で塗り分けた図です。色の濃いところが増えたところ。この少子化の世の中で、全体の3分の1で増加しているんです。

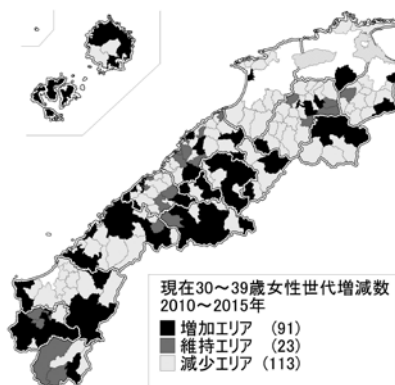
島根の合計特殊出生率が、ついに去年、1.8になりました。全国平均1.46よりも高い。これは凄いことなんです。もう一つ凄いのは分布です。島根は、県庁のある松江市、出雲市あたりの日本海側に人口集積があるんですが、その近くでは、子供が増えている気配がありません。むしろ逆に、山間部や離島の方が増えています。

そして、親の世代はもっと凄い。特に30代女性(図7)。かなり色濃く彩られています。4割の地域で増えている。減ってる地域の方が少ない。しかも、山奥の中や離島で増えている。まるで島根の田舎がパラダイスみたいになっています。

③ 「新たな暮らしのポジション」が生まれる

「フロンティア」へ

私の親の世代、昭和1桁世代は、いま、どんどん亡くなっています。だから、田が荒れ、空き家が増え、人手



「田舎の田舎」=「限界状況」だけでなく、
「新たな暮らしのポジション」が生まれる「フロンティア」へ

4割を超える(40.1%)で
30代女性が増えています！
「維持」も23地区・合わせて5割超

図7 島根県の30代女性の増減数の状況
(2010～2015年)

不足である。それは本当に大変なことです。しかし、見方を変えると、それは、新しい暮らしを始めるレギュラーポジションが空き始めていることを意味します。2年前、徹底的に島根全県の集落調査をして、ヒアリングやアンケートを実施しました。もうみんな、「一緒に地域に入って頑張ってくれる人であれば、Uターン、Iターンでも積極的に受け入れて頑張ろう」と8割以上の方が賛同しています。そして、そういった取組みも始まっています。

それが本当に大きいんです。地元が動かないと、県や市町村だけが動いても定住は進みません。だから、限界状況ではあるけれども、新しい暮らしのフロンティアが広がっていると捉えます。

④ 匹見の移住者

実際に、どのような人が、田舎に定住しているのでしょうか。

例えば、東京の首都圏のIT企業にお勤めの夫婦が、島根の山奥の^{ひきみ}匹見というところに引っ越された。なぜ、島根なのか、しかも匹見というすごい山奥に。聞いてみたら、結構納得なんです。

「稼ごのいい便利な暮らしで一生暮らしていける。しかし、それでいいのか？ もっと人や自然、伝統とのつながりを感じ、何か残る暮らしがしたい」と、ご夫婦は思われたそうです。そういう人が選ぶのは、例えば、そ

の人が愛媛に来るとしても、松山のマンションではありません。儲けや便利さを求めるなら、東京にそのまま住んでいけばいいんです。そうでないものを求めるなら、真逆のところ、ちょっとした田舎ではなく、本格的な田舎、すなわち田舎の田舎となります。そこには、人のつながりもある。伝統とのつながりも息づいている。そして自然もそこにある。

そういう所へ向かうということは、私は非常に自然なことだと思います。しかも、そのレギュラーポジションが空き始めている訳ですから。

(3) 定住の1%戦略

① 1%の根拠と実績

私の開発したプログラムは、EXCELシートにデータを入力して、人口予測等を出すものなのですが、必要とする入力データは、5年前と現在の5歳刻みの男女の人口だけです。そして、全国、全市町村、毎月でも各地区出そうと思ったら出せるというものです。

さらに、このプログラムでは、人口予測だけではなく、どうすればいいのかという処方箋を出します。各地域ごとに、どの世代を何世帯何人定住させたら、人口が安定するかを出します。地域に対して「このままでは消滅するぞ!」とだけ言って、それで終わってはいけません。

島根県の中山間地域の227地区(=地元)すべての人口が減らない、高齢化も止まる、子供の数も守れる、この3条件を満たすためには、227地区合計で1,251組2,920人という数字が出ます。島根県の中山間地域は298,000人が住んでいますから、ちょうど1%弱。つまり100人につき1人、いままでよりも定住を増やせば、「いける」ということとなります。

しかも、結構、山奥や離島で、定住を達成した地区が多いんです。そうしたことから、「端からめくり返しが始まっている」といえることが言えます。

② 診断と処方箋の効果

平均して1%定住を増やせばよいということなので、全地区で1%増やすということではありません。また、なかには1%以上増やす必要がある地区もありますが、2%までいくことは稀です。だいたい1%程度でほぼ

収まります。私は、こういったことを10年前以上から、いろんな集落、小学校区、市町村を回っては、講演のときに必ず診断し処方箋を提示します。「みなさんのところは、このままでは、こうなります。でも、これぐらい毎年定住を増やしたらいけますよ」と言うんです。

大抵、3世代、20代、30代、60代を1組ずつ定住させればよい場合がほとんどです。私は、優に300ヶ所いろんな場所へ行きましたが、「藤山さんそんな無茶言うたら困る。やる気なくなった」などと言われたことはありません。

逆なんです。皆さん、さっきの団地の造り方みたいに、ドカーッとやらないといけないと思っていたんです。「ああ、何だ、各世代1組ずつでいいのか。もっと早く言ってほしかった」ほとんどこういう反応です。例えば、美濃地^{みのじ}地区。ここも山口県境の山奥ですが、3、4年前に「美濃地は各世代1世帯ずつ」と診断したんですが、そこから自治組織作って地区ぐるみで空き家対策含めてやったんです。一気にこの2年もたたないうちに、9世帯17人が定住しました。優に目標達成です。こういう地区が増えているんです。

③ 出生率だけ上げてもダメ

昨年、全部の市町村が、国の「まち・ひと・しごと創生本部」に人口ビジョンを提出しました。残念ながら半分以上の市町村が間違った人口ビジョンを立てています。出生率だけとか、社会増減だけでバランスをとろうとしています。私のところにもすごい相談が来ました。「先生、うちの市は出生率を4.3まで上げたら、やっと安定しました」とか「うちの市は5.27です」とか。はっきり言って無理です。

全然分かっていません。何が分かっていないかという、出生率を上げたぐらいでは全然ダメなんです。なぜかということ、ほとんどの地方市町村は、50年間人口が流出し続けて全世代で人口がえぐれている状態ですから、5歳未満のところだけを操作して増やしても全然ダメです。

えぐれているところ全体を取り戻さないといけないんです。しかも、3世代バランスよくやらねばなりません。

④ 愛媛県宇和島市の診断

さて、私のプログラムで、愛媛県の宇和島市を分析したので見てみましょう（図8、図9）。

宇和島市の年齢別人口構成、20～50代の年齢層が、えぐれています。そして、年齢階層別の人口増減ですが、5年前と比べて、20代前半でかなり流出しています。15～19歳の年齢層も、出ていった人の方が多いという状況です。

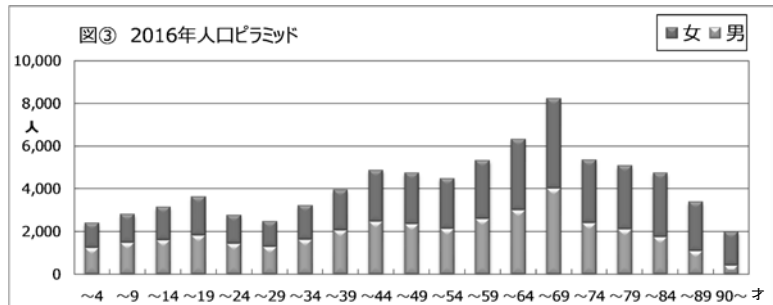
大学世代は、進学のため出ていくという理由があるので、ある程度わかるのですが、深刻なのは、20代後半で特に女性の流出が多い。これが致命的です。子供も少なくなっています。ほんの少し30代前半で取り戻していますが、それ以外は全世代流出です。この傾向がこのまま継続したら、図10のようになります。

これはもう、坂道をころげ落ちるように人口が減っていく状況です。ただ、私は人口が多くさえあればいいと言っている訳ではありません。何が一番問題かという、多くの地方都市がこういう状況ですが、どこかに安定、どうなったら安定するのか安定が見えないんです。とめどなく人口減少が進んでしまう。子供の減少はもっと早くやってきます（図11）。20年ごとに半減のペースです。

⑤ 宇和島市への処方箋

では、どうすればよいか。まず、出生率だけ上げてみましょう。現在の出生率1.60を2.07まで上げて、減少ペースがやや緩和されますが、それでも、ずっと右肩下がり、抜本的解決になりません。出生率だけ上げてダメなんです（図12）。

それではU・Iターンを増やす、つまり定住を増やすなら、どれくらい必要かというと、だいたい各世代20代、30代、60代とも140組ずつです。定住だけで対応するな

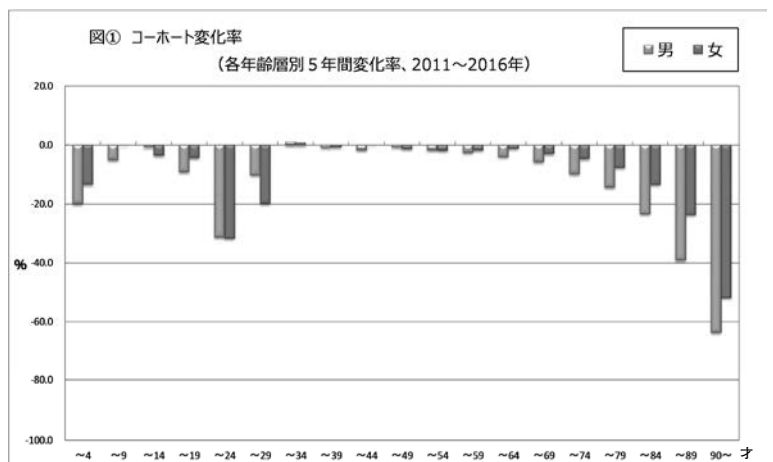


人口78,989人、高齢化率36.5%

主力世代の60代後半が元気なこの10年で勝負！

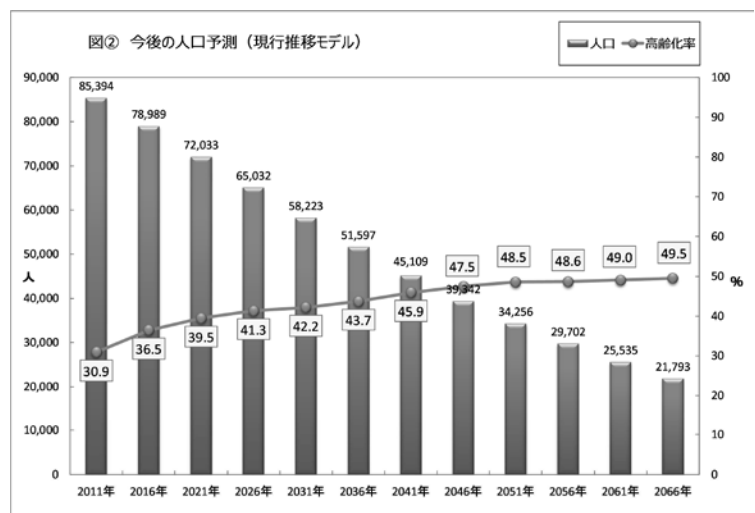
図8 宇和島市の年齢別人口構成（2016年住民基本台帳）

* 5年前の5歳若い集団との比較



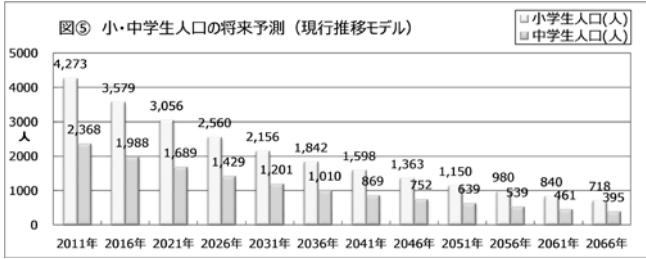
20代の流出超過大！、30代前半で少し入超へ

図9 宇和島市の年齢階層別人口増減（流入出）率



人口減は急速に進行～高齢化も着実に進む

図10 現状維持シナリオ（2011～2016年動態が継続）



このまま行くと20年ごとに半減ペース

図11 小・中学生の人口予測 (現状維持シナリオ)

ら、1%よりちょっと多め、1%強やればいいんです。そうすると、子供の数も確保し、安定に持ち込めます(図13)。

今度は、合わせ技でいきます。出生率を2.0ぐらいに上げる。そして、高校を出た人の流出を半減する。そうしたら、各世代、100組ずつの定住でいいんです(図14)。子供の数は、出生率を上げれば、すぐに1.5倍から2倍近くになります。こうした様々な選択枝から選んでいけばいいんです。

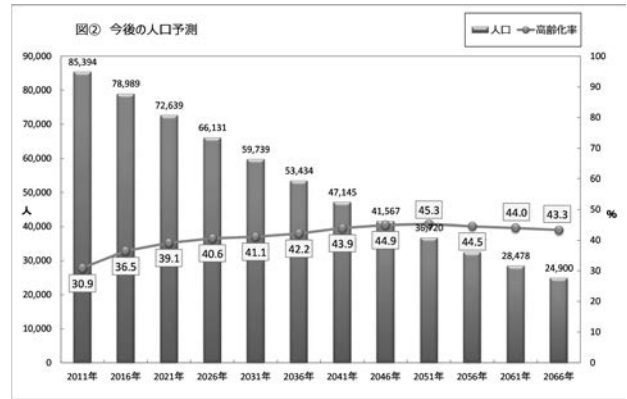
⑥ 地元単位で実施

ただ、市町村全体のこういう人口ビジョンだけでは、絶対にダメです。抽象論となり、住民が本気になれません。必ず、小学校区ぐらいの大きさを基本単位(地元単位)にやってほしい。

例えば、島根の^{おうなん}邑南町。ここは公民館区が12あり、小さなところは200人切るところから、2,000人という大きなところまで、まちまちです。公民館区ごとに人口予測と処方箋、それぞれの世代、何組ずつ取り戻したらいいのかを提示しました。ほとんどの公民館区が各世代1組ずつです。邑南町は自治組織つくって、そして町役場も、全部の公民館に正職員を配置し、地域の人と一緒に汗を流しました。

達成したところは、毎年イベントをやって、組長さんにバラの花を付けて表彰してあげたいですね。このようにすると、「あそこは何やっているのかなあ」と関心が高まり、情報共有が図れます。これが大切なんです。「うちも、これやろう」とか。多いところでも2組、3組でいいんです。ここまで来て、やっと住民のやる気スイッチが入るんです。「なんだ、1組ずつで

* 出生率のみ改善(現行1.60→2.07)させた場合の人口予測



人口安定化は実現できない→定住増加が不可欠!

図12 出生率のみ改善(現行1.60→2.07)させた場合の人口予測

●3世代各140組、現行よりも流入増加(計420組、980人)=1.25%
*20代前半男女+30代前半子連れ夫婦+60代前半夫婦

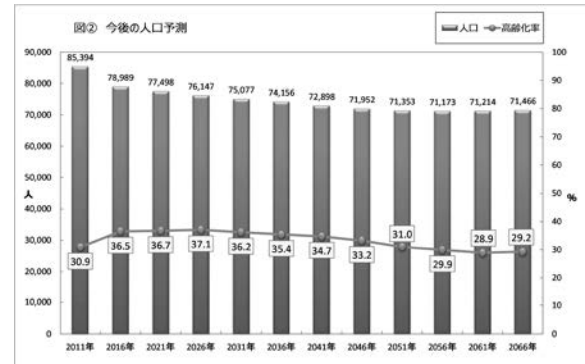
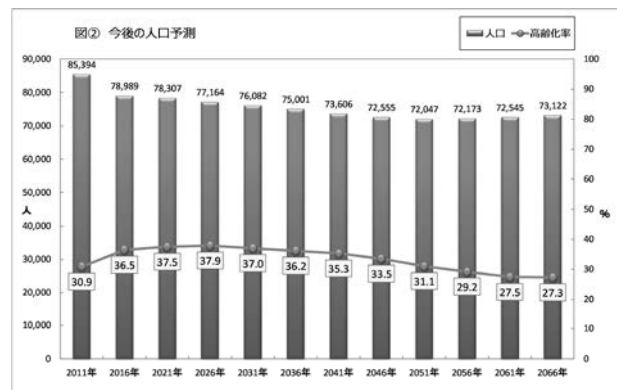


図13 U & I ターン増加シナリオ (=毎年140組増加)



人口は7万人台で安定でき、高齢化率は低下する

図14 合わせ技シナリオ(出生率2.0&定住100組)

いいの。だったら、空き家も1組ずつ、多くても3世帯分毎年ちょっとずつやればいい」というふうになる。決して、法外なペースが求められる訳ではないんです。

例えば、^{いずわ} 邑南町出羽地区は12集落あり、毎年3世帯の流入が必要なんです。12集落ごとのローテーションで考えると、1集落あたり4年に1世帯です。オリンピックペースです。これぐらいまで、みんながわかると、「うちでもできる。やろうよ」ということになるんです。「市全体で140世帯」だけでは全然抽象論です。だから、地区（＝地元）ごとで是非やってほしいですね。

宇和島市は、小学校が約30校あります。そうであれば、30校区に分けて、これを毎年リーグ戦でやってほしい。それがすごく大切です。

地方創生において、去年、市町村は人口ビジョン総合戦略を立てましたが、それで終わらず、それぞれ小学校区ぐらいの「地元」単位で「予測し、目標を立て、具体的なプランを立て実行する」ということをお願いしたい。

3. 所得の1%取り戻し戦略

(1) 所得の1%取り戻し

① どこから取り戻すのか（使いみちを変える）

ここまで来ると、割と話が早いんです。人口を1%取り戻せばいいのであれば、必要なお金（所得）も1%は必ずです。それでは、その1%をどこから取り戻すかということなんです。今までだと外からお金を持つてくる発想になります。

そうではなくて、私が1%というのは、自分たちが日々使ってるお金の使いみちを変えていくことから始めたらどうか、ということなんです。私は別に企業誘致や外国人の爆買いも否定しません。しかし、その前にやるべきことがあると考えます。自分のお金の使いみちを1%も変えられないところが、外からお金が取れると思えません。

② お金が外に流出している

さて、日々みなさんが使っているお金の使いみちについても、徹底した調査を行いました。この調査で、田舎の人がだいたい何にどれだけ使っているのかが、分かってきました（図15）。

島根の田舎でも、食費のナンバー1は外食です。しかも、大半を地区外で食べています。外食によって、お金の羽が生えて地区外にどんどん流出しています。灯油・ガス代とか1世帯あたり年間11万円です。ちなみにパンですが、だいたい1世帯3万円買っています。全国的にも、だいたい1人年間1万円買っています。千人の村があれば、1千万円分パン買っています。すごい数字です。

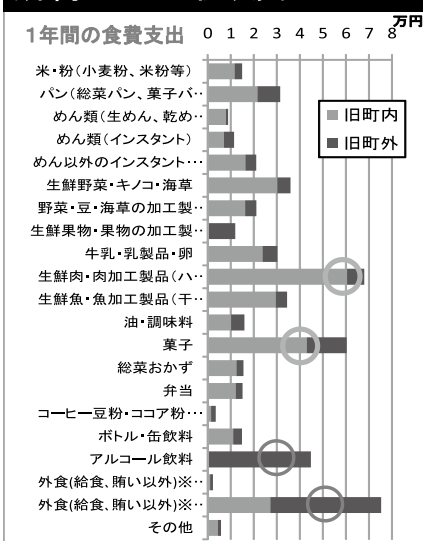
要は、モノを外から買っているのを、中から買う、または中で作るようにすればどうかという話なんです。外から買っているうちは、所得も増えないし、人口も増え

ません。去年、中国地方の自治体と協力して、地域の人が何をどれぐらい、外と中で買っているか、人口4,000人ぐらいの2つの地区で調査しました（図16）。

その結果、半分を地区外で買っていました。この瞬間で、半分が外に出ています。では、残りの地元での買い物のうち地元産の割合はどれくらいかという、食料品で5%~6%です。こんな状況なら、人口が減るのは当たり前です。燃料はほとんどが化石燃料ですから、地元産はほぼ0です。

昔、食料や燃料は、ほとんど自給していたと思います。それを今のように95%ぐらい外から買っていたら、人

所得の1%取り戻し



資料：家計調査結果（島根県中山間地域研究センター）のうち0町8世帯分から作成

子育て世帯の消費特徴と

(1) 食費 潜在需要例 (by有田研究員) 購入先でみると

○外食、アルコールは町外購入が多い
→1世帯当たり年間約8万円が町外移出

消費額でみると

○肉類、菓子類などの支出が特に高い
→町内購入が多いが、町内生産でないため、販売手数料除く約10万円は町外移出

(2) 住居光熱費

○灯油・ガス代など住居光熱は大部分町外流出→年間約11万円(0町平均)

↓ 潜在需要として把握が可能

①地域の世帯構成把握

②世帯構成踏まえ、サンプル設定し、本調査手法により食料や燃料の消費把握

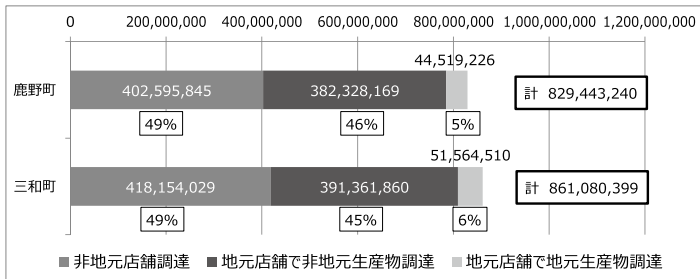
③地域外への移出額把握(①×②)

→例えば0町の子育て世帯(18歳未満親族のいる950世帯)の4割が菓子の半分を地産地消型にできれば...

図15 中山間の子育て世帯の消費特徴、支出額

中山間地域における食料の調達状況例

ほぼ半分が域外で購入。地元産は全体の5~6%のみ。



●鳥取市鹿野町(人口3,932人)、広島県神石高原町三和地区(人口3,939人)における世帯ならびに主要施設におけるデータ

* 燃料の地元自給率はほぼ0のところが大半

*平成27年度「中国地方知事会共同研究 成果概要」より

図16 中山間地域における食料の調査状況例

口が減るということなんです。しかし、希望も持てます。取り返し放題です。実際にどれくらい取り戻せるかというのを、1,620人の村で試算しました。昔自給していた基本的な食糧、燃料について、一気に100%は無理だから50%取り戻しただけで、年間2億円です。食料・燃料の取り戻しも、一度でなくていい。1%ずつでもいいんです。こうしたことをやると、そこに大きな可能性があるんです。

③ 益田市の流出事例

より大きな都市圏、人口7万の、私の住んでる益田市でもやってみました。なにがひどいかというと、企業と行政も含めてですが、外からモノを買い過ぎです。人口7万で、1回目に外から買った、つまり1次調達した総額は1,420億円です。一人当たり200万です。この数字は、住民所得と等しい数字です。稼ぎ(所得)をそのまま外に差し出している。こんな状態で、どうして地域が保っているのか。よく見ていくと、補助金、交付税、年金という輸血で年間1,000億円を注入してもらっている。なるほどこれで回っているのかということです。

こんな状況は、はっきり言ってよろしくない。どれくらい持続性があるか怪しいものです。かなりひどい状況ですけど、ここまできたら、私は、逆に前途洋々だと思います。なぜなら、もうこれ以上悪くありません。稼ぎをそのまま差し出しているから。これ以上買いたくと

も買えないんです。

④ 所得取り戻し1%への転換

しかも、自分たちの所得と同じくらいを買っているのであれば、100ほど外から買っているのを、来年は外から買うのを99ほどにする。残り1%を原材料を含めて、中で作り切れば、パンだったら小麦粉から作り切れば、全部付加価値が中に落ちて、それが1%の所得にそのままなる。これ、絶対です。恒等式です。

自分たちが使っているお金の使いみちを1%変えるだけで、可能性があるのです。そのことに気付いてほしいんです。これらについて、行政頑張れとか言われますが、その前に、住民側も、お金の使いみちを変える方へ舵を切ってほしいんです。10円20円ビールが安いからといって外で買ったり、パンは大手メーカーの方が安いと言っていたら、その地域は身ぐるみ剥かれます。

⑤ スーパーキヌヤの事例

実は、本当に1%取り戻している事例があります。いま、全国的に有名になった、島根の地元スーパー「キヌヤ」です。我々が一番よく買い物に行くのは、スーパーかコンビニですが、皆さんも思い浮かべてください。そこで、地元産のものが何%ぐらい売られているか。キヌヤは、頑張っていた方ですが、衣料や雑貨を含めて地元産の売上は8.4%でした。頑張っていたけど1割もないんです。大手の県外スーパーなんかもっと低い数字になります。この意味することは、買えば買うほどお金は外へ出て行くということです。外で買われたら、地元スーパーは倒れます。また、外から大量仕入れしてドカーンと売るビジネスモデルで勝負しても、地元スーパーは大手に勝てません。

だから、キヌヤは、地産地消に勝負をかけています。全ての店舗で、隅っこではなく正面玄関の所に、地産地消コーナーを設けて、15%の手数料を払えば、誰でも自分で値段をつけて商品を置ける。ここでどんどん売上が伸びています。私も専らここで買います。全然、普通の野菜と違います。「ニンジン」と「ニンジンもどき」ぐらい違います(図17)。

(株)キヌヤの 地産地消率

* (株)キヌヤ本社=島根県益田市、島根県・山口県に21店舗

時点	割合
6年前	8.4%
現在	14.9%

毎年1%アップ



年商全体132億円
 地元産商品販売額20億円
 LBクラブ(ローカルブランド)
 に607事業者が参加

地元仕入れ額
 16億円

* 安心でおいしい、地域の個性ある暮らし

図17 (株)キヌヤの地産地消率と地産地消コーナー

本当においしくて、新鮮そのものです。今は、生産者の名前で買っています。ニンジンには〇山〇男さんとか。田舎には、野菜作りの名人、四天王みたいな人がそこら辺にいます。キヌヤの地元産品売上、今や20億円、地元産品売上率14.9%です。そして、地産地消コーナーに出荷している農家のなかでも、次々発想を変え間引き菜から含めていろんな種類と大きさの野菜を毎日出した農家が1千万円プレイヤーとなっています。

⑥ 地域で暮らすこだわり

どこでも食べられるニンジン、どこでも食べられるうどん、パンで暮らすのなら、地域に暮らす必要がありません。日本で一番、商品が集まる東京で暮らせばいい。だから、そこにこだわってほしい。

行政の調達、例えば机や椅子等、どこの自治体も大手事務用品メーカーの製品ばかりです。そもそも、なぜ自分たちのところで作らないのか。農業も林業も、機械を買い過ぎです。機械貧乏。最低限・最小限の機械を、みんな使った方が、実質的な実入りが違うんです。そして、燃料については、薪ストーブでやって、薪ストーブさえも自分たちの手で作る。こういうやり方なんです。

⑦ イタリアの事例

世界はどうか。イタリアの山中がすごく元気らしいというので、行ってきました。本当に元気でした。イタリアの村は合併していません。500人、1,000人の村ばかりです。その規模でやっていけるのか？ やっていま

した。もう徹底的に地元産のもので衣食住とも。今、イタリア経済が危ないと言われていますが、イタリアがギリシャのようになって、この村は大丈夫でしょう。

それだけではなくて、観光客がすごいです。もう、びっくりするぐらいです。村から村へ行ったらパスタもチーズも違う。家の建具などは地元の職人さんが作る。料理も街々で異なり美味しい。しかも、観光客が落としたお金は外へ逃げていかない。ここまで最強の守りと攻めなんです。

(2) 「中」(地域内)でお金を回す

① 「中」でお金を回す発想

外からモノを揃えるのは否定しないけれども、お金がただ漏れです。だから、穴を塞いでください(図18)。

今までは、外からお金を取ってくることを評価していました。行政にしても、地域にしても、10億円のプラントとか、5億円の補助金とか。しかし、問題は、その後のことです。外からお金を取ってきた後、何が欠けているのか。「中」(地域内)でお金を回す発想が欠けているんです。同じ100万円ゲットしても、「中」で8割回す場合と、6割回す場合、2割しか変わらないように思えますが、最終的に「中」に落ちてくるお金は、乗数効果で2倍違います(図19)。

お金が落ちると、そこから経済循環が始まりますが、最初の3巡目ぐらいまで見たら、例えば、工場とか企業とかの投資が地元本当に役立つかが分かります。最初の見かけ上の投資額とか補助金額にだまされて

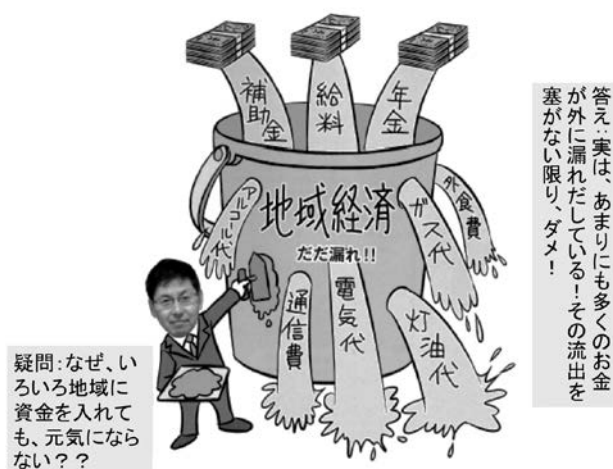


図18 だだ漏れのお金



図19 乗数効果による所得額（需要額）の差

はいけません。「中」でどれだけお金が回るかです。

今、全国的に大規模バイオマス発電が流行ってます。すごい金額、20億円、30億円かけてドーンと造るみたいな感じです。しかし、発電用機械等ほとんど外から買うものばかりです。機械代などお金を地区外へ持っていかれたら、地元への実入りがありません。実質的に「中」の人の給与になるとか、「中」から物品が調達されるかどうかの問題なんです。

② 「中」への波及効果

エネルギーにしても波及効果の問題です。灯油やガスでは、お金は国外へ流出しますが、薪だと地元の林業に波及します。パンも一緒です。大手メーカーから買っているうちは、本当に地元に残らない。地元で焼いて、しかも、米粉パンとかだったら、地元米を使えば、単に焼く場合と倍くらい違うことになる。地域としての実質的な実入りを見ていくんです。

今、環境庁と一緒に、家計調査をして品目別の購入額と、どれくらい「外」と「中」で買っているか把握し、もうちょっと「中」で買ったり、作ったら、どれくらい定住人数が増やせるか、こうしたシナリオ作りを研究しています。

経済もあせらずに、しかも外への依存がなく、自分たちのお金の使いみちを1%変え、地域循環型でやってほしいと思います。

(3) 小さな拠点と合わせ技

① 小さな拠点

社会のシステムも「中」で循環し、つながりのいい形に組み替えていかなければなりません。昔は、どんどん上から、国や県からお金が降ってきて、そのお金を縦割りを使うという自治体シナリオもありましたが、もはやそれはありません。

平成の大合併で自治体の規模が大きくなってしまいましたから、もう1回、「地元」単位で、そういう仕組みを作り直す。集落では単位が小さ過ぎ、市町村では大き過ぎます。「地元」単位で定住の人口分析をし、目標を決め、循環の仕組みを作り直すんです。

我々の身体に例えたら、元気になるためには、40～50兆といわれる細胞一つ一つが元気にならないとダメなのと同じです。太い血管とか骨格だけ元気になってもダメなんです。

もう1回、「地元」に活を取り戻す。それが「小さな拠点」です。

② 邑南町の事例

様々な「地元」の作り直しが始まっています。去年、クローズアップ現代に出た^{おうなん いずわ}邑南町出羽地区。ここは12集落が点在する山奥です。この地区で「集落あたり平均人口80人もいない（出羽地区の集落平均人口76.08人）。12集落バラバラでやってもダメだ。実組織もいっしょになって、地区ぐるみで定住で勝負しよう」と計画を作り、活動を始めました。

しかも、12の集落だけが頑張るのではなく、自治会も乗り出して頑張るんです。例えば空き家の活用、これは、個人任せでも、行政任せでもダメです。なぜ、行政任せでダメかというと、行政は公平かつ機械的に処理しなければならない。行政の担当者自身が「この夫婦どうかなあ」と思っても、職務上、空き家バンクとか対応して貸さなければならない。これはまずいんです。ちゃんと大丈夫かどうか見極めてから貸さない。

そこで、見極めが必要なら民間でやろうと、地域でまちづくり会社「合同会社出羽」を作りました。空き家も会社が責任を持って修理し、貸して長期的に資金を回収する。このように、小さな集落ではできないことを、会社がワイドにカバーしています。

薪も会社で集約し、薪ストーブも売出しています。そういう小さなことを積み重ね、不動産で0.5人、薪で0.3人のように積算していくと、2人程雇用できるということになり、今年の4月から2人定住しました。

③ 小さな拠点での合わせ技

さきほども申し上げたように、定住は、世代ごとに年1世帯ずつでいいんです。そして、農業だけで食べていけないけれど、小さな拠点で薪の製造と販売、冬場は林業経営等で合わせて1本。0.5、0.3、0.2で1本。こういう仕組みを作っている所が、山奥であっても定住を伸ばしています。

これが「合わせ技」です。こういう仕事の作り方が定住のための「合わせ技」であるとするれば、拠点は縦割りであっちこちに作るのではなく、拠点をまとめる。その拠点を支える交通も、人とモノと一緒に運ぶ。こういう発想に立つと、すごくすっきりします。例えば、防災ステーションが、エネルギーステーションも兼ねる。こういった構想を、私は10年以上前から提唱してきましたが、やっと国も小さな拠点というものを4年前から打ち出しました。

これは決して、山奥の集落から人を追い出して拠点到住まわそうという発想ではありません。真逆です。今のまま広々と住んでいただく。しかし、それを支える拠点とか交通が縦割りバラバラだとダメです。そこは、合わせ技で一緒にやろう。こういう発想です。これを「地元」単位に作っていく、ということが、今の国土計画でも地方創生の中でも出てきているんです(図20、図21)。

④ 全国で小さな拠点づくりが始まっている
全国でいろんな小さな拠点づくりが始まっています。

高知県の四万十市のいちばん奥の大宮地区。人口300人の地区で、JAが撤退したガソリンスタンドを自分たちが出資して会社を設立し、一緒にお店も復活し運営している。そして、地域の「たまり場」にもしている。お店復活後に

行って人口診断したら、人口が増え始めています。やるころは、成果がついてきている。

島根県の雲南市の一番奥の畑地区、人口340人、5年ぶりにお店が復活しました。ここも「合わせ技」です。この施設自体、もともと公民館機能、福祉センター機能、コミュニティセンター機能を一緒にやっていますが、普段そちの仕事しながら、お客さんが来たらお店に行ってお店を打つ。だから、成り立つんです。しかも、お店のみなさんは、その後、買った人の家までお届けです。もう安心ですね。ただし、これ自体は赤字でしょう。しかし、このことで、お年寄りが施設に入らず、安心し

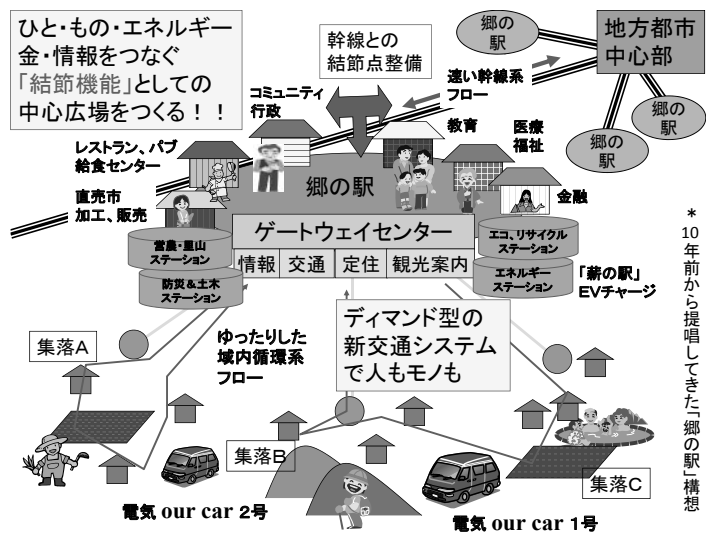


図20 「郷の駅」構想と集落

国土のグランドデザインと総合戦略にも、集落地域を支える新たな複合機能拠点として「小さな拠点」構想が登場



図21 「小さな拠点」構想

て暮らしていける。実は全体として見ると大黒字なんです。

⑤ 小さな拠点をつなぐ

小さな拠点でもう1回地域内をつなぎ直す。そして、小さな拠点を田舎にだけ作るのではなく都市にも作り、パートナーとして結ぶ。そうすれば、都市の人も新鮮なものが入手でき、しかも災害時も安心、田舎にも遊びにいける。そして、小さな拠点が地域内外のいろんな人が交流する場になる。こういうダイナミックな都市と農山村の共生が、小さな拠点を広域ネットワークでつなぐことで実現するのです(図22)。

都市と農山村の共生へ～拠点とネットワークの重層的連携と相乗進化

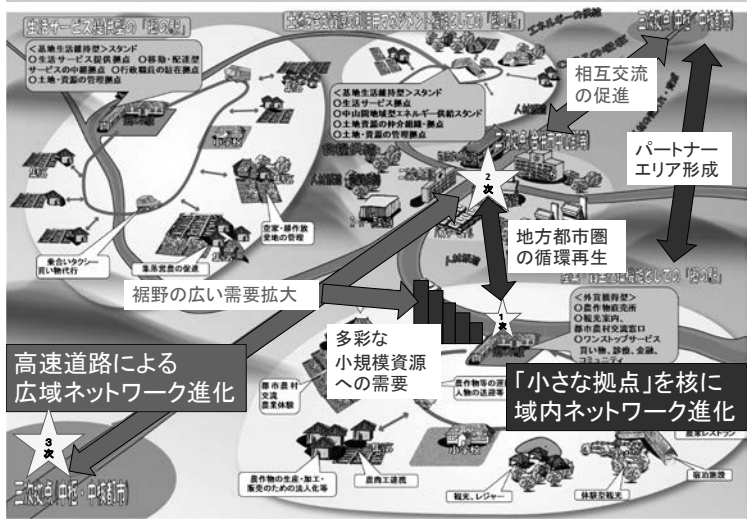


図22 小さな拠点のネットワーク

⑥ ロングテールを活かす

そもそも、我が国の豊かさというのは、同じものが大量に採れることではありません。日本は、地形的に4つのプレートがせめぎ合う、複雑な津々浦々の世界です。ちょっとずつ、いろんなものが採れるのが日本のよいところ、おいしいところ、幸せなところなんです。このことについて調べてみたら、1軒の農家で50~60種類、いろんなものをちょっとずつ作っているんです。それを、今まで「大規模だ、ドーン」みたいなばかりで、農業も林業も漁業も走ってきました。

日本の海は、どこでも普通に網をひいたら、季節ごとに、いろんなものがちょっとずつ採れる。それこそが自然であり、生物多様性です。それをそのまま、自然も多角形なら、暮らしも多角形にする。自然と暮らしの多角形が重なり合うから田舎は幸せなんです。いまはやりの言葉で言えば、ロングテールです(図23)。自然は、いろんなものがちょっとずつ採れる。しかし、我々は、この半世紀ぐらい「規模の経済」みたいなことばかり、ロットが多い物ばかり。生産も流通も消費もその方向に行っていました。

●わが国の地方圏(中山間地域)＝細やかで多様な山、谷、津々浦々

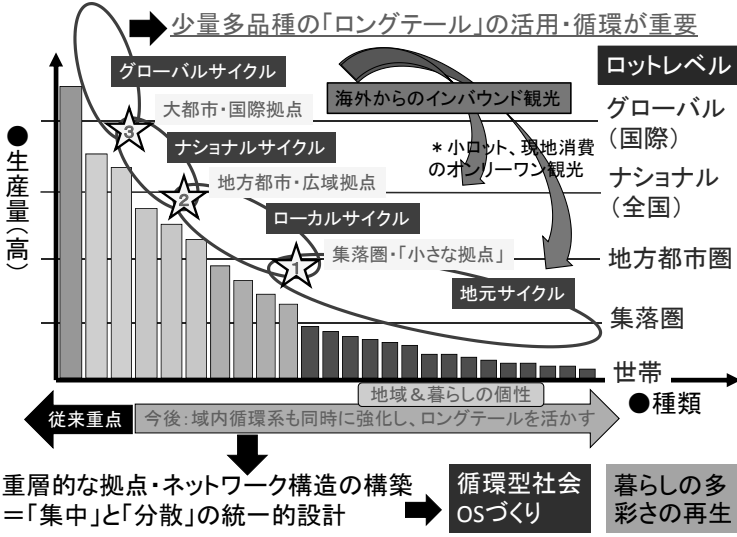


図23 ロングテールのつなぎ直し

ロングテール部分を全部切り捨てていたんです。でも、ここが結構宝の山なんです。ここをもう1回つなぎ直すんです。ロングテールの部分がまったく無くなったら、どこも同じになります。どこも同じなら、観光は成り立ちません。

⑦ 創造的呉越同舟の考え方

だったら、どういシステムに変えるか。一言でいうと、創造的呉越同舟です。創造的呉越同舟とは、一緒に合わせ技で流通させ、生産することです。

例えば、新聞の配達方式。都市のまん中ぐらいいまでは、いろんな新聞社が規模の経済で、それぞれが大ロットで持って来ているは

ずです。朝日は朝日、読売は読売、日経は日経で。そこから後は一緒に呉越同舟。いくら嫌でもやるしかないんです。新聞店が一緒に配ってます。そのように、新聞だけではなくて他もやればいいではないかと。

どうせ、拠点から1軒1軒回るんですから、一緒に運ばばいい。これだけIoTが発達しているんですから。そして、帰りは、なぜ手ぶらで帰るのですかという話です。帰りに、朝どれ野菜ぐらい集めて回ればいい。物理的に本当にできる。でもやってない。今までの縦割り発想になっている。実際、ある新聞社は、朝どり野菜、有機野菜を積んで帰っている。すばらしいことです。それだけで効率2倍です。

そうした仕組みで小さな拠点を結ぶと、ある意味、地方都市の市場機能の回復になります。今の地方都市の市場機能は、ダメになってしまっています。外からどんどん持ってくるだけになって、「中」で集めて回してない。だから儲からない。

こうしたシステムに、組み替えていかなければならない。

4. 地域ぐるみで介護費用の節減

(1) 現状

そして、次は介護です。介護も今とんでもないことになっています。今年、ついに、介護費用だけで10兆円を超えました。他に医療費が40兆円あります。だいぶ頑張っても、10年後には倍になります。介護費用1人20万円です。

これ、誰が払うんですか。誰も払えないです。今までとはとにかく、国にお金を要求していた。だけど、もうお金がない。介護、医療の金額だけを見れば、税金をあげるしかない。しかし、それではダメです。これからは逆の発想が必要です。

(2) 逆の発想

みんな、視野が狭いんです。先程の地産地消のキヌヤさん。お店まで週1回、買物支援バスを走らせました。そして、田舎から20分かけて、せっかく来るんだから、手ぶらでなくて、野菜を収穫して持ってきてください。売って儲けて、買って帰ってください。このようにやっただけです。そうしたら非常にヒットして、どんどん売れ

ている。

しかし、売れたといっても80歳前後のおばあちゃんが主力ですから、月に2~3万の売上です。でも、年金暮らしで5~6万の生活にとって2~3万はすごいことです。

これを、農水省の役人にも言うんです。「こんな小さな農業と馬鹿にするな」と。なぜかという、このおばあちゃんたちが浮かしてる介護費用や医療費は、数倍だ。金額にすると何百万のオーダーだと。だから、全体で見たら、実はすごくペイしてる。

先々週、京都の綾部市に行ってきたんですが、このおばあちゃん方は、平均年齢89歳だけど、すごい。10年前から3世帯4人の集落で、栃餅を作りまくっています。このおばあちゃんたち、1人で介護費用だけで200万は浮かしています。

都会の杉並区はこれできません。だからこそ、可能性のある「田園回帰」と言っています。こういうことを田舎はできるのです。

(3) 要介護認定の低い町

島根の山間部のある町を徹底的に介護分析してみました。面白い結果が出ました。

この町は、明らかに各年代の要介護認定率が低いんです。お達者度が高い。別に、この町はけちっていない。ちゃんとやるべきことはやっている。要介護認定率が低いから、1万人くらいで8,000万円を浮かしている。これを、全国レベルに引き直すと1兆円です。

こういうことが、実はできているんです。しかも、まだまだいけると思っています。この町の12の地区を比べてみると、かなりバラつきがあります。もし、成績の良い地区並みに他の地区も浮かせたら、それを日本全国で実現できたら、少なくとも3~4兆円、うまくいけば5兆円くらい浮くかもしれない。

こういうことをみんなで学び合い、手法を共有し、それをやっていく。そうしないと、もう、お金は増えません。むしろ、これからは元気合戦、お達者合戦をしないとイケない。お達者合戦をこの町だけでなく、愛媛でも、更に日本全国でもしていくんです。元気なところは何かあるのか。皆さんもお分りかと思いますが、はっきり言えば、年をとっても役割があるかどうかなんです。そう

いう意味で、タワーマンションは、非常に危うい。役割のある田舎の方が良さが出るので、今後の地域政策、その研究のあり方は、発想を変えなければいけません。

5. まとめ

(1) マス・ローカリズムの手法と情報の横展開

いままでは、偉そうな学者とかコンサルタントが号令かけて、みんなで行くみたいな感じでした。そうではなくて、地区ごとのチャレンジを同時多発的に、人口定住に向けても、介護保険に向けても、沢山していかなければいけない。いろんな地区、10や20ではなくて、全国で数百、数千のレベルでやって、毎年どこで、どのように人口が増えたか、あるいは、介護保険が下がったか、という統計を出す。そして、頑張ったのは、共通して何が促進しているのか、あるいは、逆に、こんなにひどいのは、何が阻害しているのかを分析し、分析結果にもとづいて、共通の政策として打ち出す。これをやらないといけない。今までの政治は、そのように現場に行っていないから、2、3年であっちこっち政策が変わり、全然効き目がありませんでした。

こういうやり方は、マス・ローカリズムと呼ばれています。一斉蜂起型とも呼ばれます。そして、データを検証し、結果を横展開する。このように数百件レベルでやると、自分たちと同じような条件の地域、例えば大きさが同じとか、地理的条件が同じとか、課題が同じとか、そういう地域は何をやって、どうなったのか知ることができます。「ああ、なるほど、うちと同じような市は、こうやって成功している」あるいは「これやって失敗している」というように。

私もいろんなところに呼ばれますが、私のご高説を聞きたいんじゃないんです。自分たちと同じような他の地域がどうしてるかを聞きたいんです。

(2) 時代の変換点

そして、とうとう時代が変わり始めました。世の中、もう行き詰っています。田舎の田舎以外は閉塞感で満ち溢れています。今まで「規模の経済」一辺倒。大量生産、大量輸送、大量消費し、大量廃棄して終わり。さきほどのロングテールとか、細やかな生業とか、全部潰してき

ました。

そうではなくて、一つ一つの細胞にもう1回明かりを灯し、循環を取り戻す。それに地域をつなげて、地域と地域をつなぐ。生態系のやり方と同じです。一つ一つ、足元から立て直す。そのようにして新しい社会や経済、もっと言うと文明を作ってほしいと思います。生態系は、決して一人勝ちがない。ライオンが一人勝ちしたらシマウマもいなくなって、ライオン自身も住めなくなる。それぞれが息づくのが生態系なんです。

そして、こういうのを、日本だけではなく、アジア、アフリカにも広げる。アジア、アフリカが、日本と同じことをしたら終わりです。1回人口を集めて、もう1回戻すようなことではなくて、日本の教訓を生かして、そのまま持続可能な社会に移行してほしい。だから、大学もそういった田舎のプロをつくる大学、しかも、学び合い型、ネットワーク型の大学にしたいと思います。

(3) 全国で始まる「めくり返し」

ただ、うれしいことに、全国各地でめくり返しが始まっています。端っここのところで、続々と社会増となり、過疎が終わっています。

北海道下川町、町有林を60名で完全に回せる林業に切り替えていく。そして、もう灯油を使用しない。町の中心地はすべてチップボイラー。酪農とメタン発酵。集落サイトもやっている。下川町の人口、もう取り戻しています。

高知県の梶原。隈研吾設計の建物、ふんだんに木を使う、地域でいろんなビジネスをコミュニティぐるみでやってる。チップボイラーに水力発電、医療も福祉も横つながり、橋も木造、電線地中化だけでなく、すごくいいコーヒーや包丁など。ここも社会増になっています。

(4) 素敵な女性たちが未来を創る

そして、地域をめくり返している主力は、明らかに女性です。

大分県の杵築市。一番の山奥にスタッフ16人の国際観光会社。奥さんとイギリス人の旦那さんがやっている。海外のセレブたちをインターネットを駆使して、年間2,000人のインバウンド観光。東京、京都、飛騨高山を巡る。だけど最後は、地元に戻ってきます。その目当

ては、おばあちゃんのフルコースです。このおばあちゃんたちも、おおかた90歳。すごくクリエイティブ。今、若い女性たちが、田舎に来てるのは、おばあちゃん力だと私は確信しています。年をとっても、チャーミングでクリエイティブなことができる。都会行ったら、巣鴨ぐらに行かない限り、おばあちゃんの姿、山手線内で見かけません。

山口県長門市の山奥、俵山温泉で、若い女性が洋菓子屋さんをやっています。この女性が来たキッカケが、そのまた一番奥の集落の一番奥の家が、農家かなと入ってみると、なんと、ブックカフェだった。ここにどんどんみんながやって来て、時を過ごして、それがまた友愛の架け橋になったんです。ここ、ブックカフェなのでキッチンがあるんですが、ここのキッチンのドアがすばらしい。このドアのすばらしさ、わかる人とわからない人ではっきり別れます。キッチンは奥さんだけが入れればいいから、奥さん専用の大きさなんです。自分専用のドアを作ってもらえる暮らし。これがすばらしい。わかる人はわかる。

鳥取県発で全国を席卷してる森の幼稚園。自然のなかで放し飼い保育みたいな。ここの保育のために、定住までしていますから。本当、子供が育つんです。

(5) 最後に

① 丁寧な定住の実施

そして最後になりますが、今まで申し上げたことは、結局、それぞれの地元の集落に何年かに1組ずつ定住させる世界なんです。それを、丁寧にやることです。

地元住民自らが集落を案内する。年で1組でいいんですから。変な者が入って、ぐしゃぐしゃになったら当分トラウマになってダメですから。そして、移住定住のトラブルの8割は「それは聞いてなかった」ですから、そういったことを分かったうえで来ていただく(図24)。

それから、「困ってるから来てくれ」ではないはずで。失礼です。確かに困っているが、こういう可能性がある。どういう暮らしをしてきたかを伝えるんです。誰でもいいから来てくれではないです、絶対に。誰でもいいから来てくれみたいなのは、恋人も結婚相手でも多分ダメです。同じことです。

私は、こうやりたい、こういう生き方がしたい。だか

ら一緒にやろう。鉄則は「選ばない地域は選ばれない」です。そうやって入ってきた人はちゃんと定着します。集落単位で4年で1組でいいのだから、じっくりじっくり付き合えばいいんです。

② 記憶を紡ぐ

集落の秋祭りとか、草刈りとか手間暇がかかります。しかし、よく考えたら、手間をかけないと心には伝わらないし、残りません。うちの娘も秋祭りで踊りましたが、最初ヘタっぴいなんだけれど、本当に丁寧に教えてもらったら、本番はそれなりになる。そのことを、彼女は絶対覚えているはずで。

うちの集落も、葬式が増えていますけれど、そのときに、組内で集まって、「あのじいちゃんが、ほんと頑張ったから橋ができた」「あのおばあちゃん、きっかりこれだけはやとった」ということを語り継ぎます。そういう一人ひとりの生きた姿を記憶して未来につないでいくところが地元なんです。

どういうことが、記憶に残るのか。今の世の中は、最近特に、「自分だけ、今だけ、お金だけ」で開き直ってやり過ぎだと思います。その3つで生きた人は、財産は残すかもしれないが、記憶に残りますか？ そういったことを思うと、自分もちょっと背筋を伸ばして、「今だけ、自分だけ、お金だけ」から離れて頑張ろうかなと。頑張った記憶のリレーが大切で、地域が良くなるとしたら、それがだんだん積み重なる以外にはないと私は思います。私が団地とかマンションのあり方に危惧を覚える

地元のつながりと美しい暮らしの中へ定住

始まった「郷の案内」やさか暮らし1日体験～ここで一緒に暮らそう！
2012年3月 全国10都府県から40名が参加。集落住民が案内役
6つの集落、7つのコースに分かれ、「ええとこ歩き」を実現



図24 地元住民による集落の案内

のは、そういった考え方から来ているのかもしれませんが。

人口についても、いろいろ申し上げましたけれども、人口は決して抽象的な数ではありません。そこに暮らす人の人生の数のことです。一人ひとりの人生を大切に受け止めて紡いでいく。そういう地域社会を作るなかに、我々の未来があると思います。

どうもご清聴ありがとうございました。

Profile 藤山 浩 (ふじやま こう)

島根県中山間地域研究センター 研究統括監
島根県立大学連携大学院 教授

〈経歴〉

1959 (昭和34) 年10月 島根県益田市生まれ。
1982年 一橋大学経済学部 卒業。
1998年 島根県中山間地域研究センター 地域研究課 研究員。
2009年 島根県立大学連携大学院教授 (10月より兼任)。
2013年 島根県中山間地域研究センター 研究統括監。現在に至る。

〈専門分野〉

中山間地域政策、地域計画、地域人口分析、地域づくり、GIS分析

〈主な委員等〉

内閣府 まち・ひと・しごと創生本部

「地方創生における中山間地域ワーキング」有識者委員 (2015年度～)

「地域の課題解決のための地域運営組織に関する有識者会議」委員 (2015年度～)

国土交通省

国土政策局「集落地域における「小さな拠点」形成推進に関する検討会」委員 (2012年度～)

総合政策局「地域を支える持続可能な物流システムのあり方に関する検討会」委員 (2014年度～)

〈主な著作〉

- 「田園回帰1%戦略 - 地元に人と仕事を取り戻す -」
2015年、藤山 浩 著、農文協「シリーズ田園回帰」全集
- 「始まった田園回帰 - 現場からの報告」
2015年、小田切徳美、藤山 浩、石橋良治、土屋紀子著、農文協ブックレット